

3. 感染症の流行と時代の転換

川上征雄 ((一財) 都市みらい推進機構常務理事)

1. はじめに

昨年末頃に中国武漢市で発生した新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)による感染症(COVID-19)の流行は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控えたわが国に深刻な憂慮をもたらした。本年の1月16日に武漢渡航歴のある中国籍男性が初の国内発症例として確認されたが、2月3日には、発症者を乗せて横浜港に接岸した乗客・乗員3,000人超の大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号への措置を巡り人々の当該感染症への関心が高まった。結局、大型客船での感染者数は712人、死亡者は13人であった。

感染症に対しては疑義対象の流入阻止、そして隔離・封じ込めが基本であり、日本由来ではない病因は、海・空の港で入境を制御することが基本である。この感染症の流行・拡大は、人、モノ、カネ、情報が世界中を駆け巡るグローバリゼーションの負の側面が露呈したものだといえる。とりわけ中国の旧正月である春節の長期休暇直前にあって観光客の中国外への大量移動が始まった時期と重なったことは不運であった。わが国への訪問者の入国制限などの初動の遅れが、いとも容易に国内での流行を許してしまったといえる。

このCOVID-19に対して、3月11日にはWHOがパンデミックを宣言するほどに猛威を振るっている。国内外での感染は毎日拡大していき、見えない驚異の膨張は全世界を大きな不安で満たした。各国は国外とのゲートウェイを閉ざし、都市レベルでの封鎖も実施した。そして3月24日には本年開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックの延期を決定し、3月30日に、2021年7月に開催という新たな日程が決定されるに至る。かような伝染病の水際の阻止がかなわず、そのパンデミックが地球村の経済・社会活動に変調をもたらしている。

本稿ではこのような感染症の流行が、これまで過去に人間社会に与えた影響を回顧し、これから後の社会にどのような変化があるのかを考察することとしたい。

2. 感染症と人類の歴史

感染症の病因となるものについては、19世紀まではほとんど不明であった。伝染病を誘発するの

は、細菌やウイルスさらに寄生虫などであるが、細菌、ウイルスは眼には見えない微小さで不可視な対象である。光学顕微鏡の利用で細菌が、さらには電子顕微鏡が発明されてウイルスの存在が確認できるようになった。

大気中の環境汚染物質としてよく耳にするPM2.5は、直径僅か2.5 μ m (1 μ m は1mm の1000分の1) の粒子状物質を指すのだが、細菌についてはその半分以下のPM1、ウイルスは、さらにその10分の1のPM0.1という微小さが平均である。インフルエンザやマラリアの呼称の由来も不可視であるがゆえ、冬の星座の「影響」や「悪い空気」という連想から命名されたものである。不可視で測定・検出ができない病原体の存否は、実際の感染発症者の有無とその行動履歴を辿ることでしか確認・追跡ができないのだ。

(天然痘)

実に人類は太古より細菌・ウイルスとの闘いを継続してきた。紀元前12世紀の古代エジプト王朝ラムセス五世のミイラには天然痘のあばたの痕跡が認められるという。

また紀元前5世紀に古代ギリシアで勃発したペロポネソス戦争では、やはり天然痘と思われる疫病が戦況に重大な影響を及ぼした。歴史家トゥキュディデスは、感染症が戦争に与えた影響は大きかったと述べている。スパルタとの戦いにおいて、ポリスのアテナイは城壁内での籠城を決めたが、そこで疫病の集団感染が発生してしまった。その指導者ペリクレスも罹患し死亡したのである。民主政治を堅持したアテナイは軍事国家スパルタに敗れたのだが、この戦争の勝敗を決したのは戦力ではなく、疫病の集団感染の有無によったのである。

(ペスト)

ペストは、ウイルスではなく細菌が病原であるが、ネズミ、ネコ、イヌなどを宿主とし、ノミを介して人間に伝染する。6世紀の東ローマ帝国ユスティニアヌス大帝の時代に流行した。ユスティニアヌスは積極的な外征によってローマ帝国時代の旧領の多くを奪還し、往時のローマ帝国の版図回復を期待されていた。しかし、543年に大流行した

ペストによりユスティニアヌスは没し、帝国の人口は半減したといわれる。

ユスティニアヌスの死後、東ローマ帝国は急速に衰退して、地中海世界を支配する大帝国から、東南欧・東地中海地域の国家に過ぎない地位を余儀なくされた。ユスティニアヌス以降にも大帝国の復活を目指した皇帝はいたが、いずれも果たされず東ローマ帝国は衰退していった。

隋では、610年にペストが大流行したが、シルクロードを介したヨーロッパとの東西交易の結果であろう。

14世紀に至り、ペストはヨーロッパ社会で再び大流行した。罹患すると体中が黒くなり死に至ることから、黒死病とも呼称されたこの感染症は、その容貌・容姿の変化から人々の恐怖心をより掻き立てるものであった。そして当時人々が救済を求める先はカトリック教会であったが、結局のところ信仰では解決しないことを悟り、感染症に対する宗教の無力さが露呈した。当時支配的であった宗教権威の失墜、すなわち社会におけるカトリック教会の信頼が低下した。そして約2,500万人といわれる死者を出したペスト終息後には、宗教からの解放・自由が文芸復興を標榜し、ギリシアやローマ時代の文化を再生、復興しようというルネサンス期を迎えたのである。さらに人口減による労働力の減少は、農民の相対的地位を向上させ、農産品価格の上昇とともに格差が縮小された面もある。

ペストは、17世紀のヨーロッパにも流行がみられた。1665年にはロンドンで大流行し、このときはイヌ、ネコ、ネズミの殺処分が積極的に行われた。ケンブリッジ大学もやはりペストの流行でしばらく休校となった。大学休校中のニュートンは、1665年から1666年にかけて故郷ウールズソープに帰省していたが、その間に万有引力の法則を着想したという。一人でゆっくりと思索をめぐらすことができた時間が成果を与えたとして、その18か月間は「創造的休暇」といわれている。

1679年にウィーンでペストが流行し、15万人が死亡した。

さらに19世紀にもペストの世界的な流行があり、1885年には北里柴三郎が香港でペストの実地調査を行っている。

(新大陸と感染症)

15世紀からの大航海時代にあって、コロンブスの新大陸発見(1492年)は、ヨーロッパとアメリカ大陸の間で多くのモノの交換がもたらされた。ヨ

ーロッパからは牛馬や羊などの家畜動物が持ち込まれ、また小麦、サトウキビが移植されたのに対して、アメリカ大陸からはトウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、カボチャ、トマト、ピーマン、たばこに七面鳥がもたらされた。これらと並行して天然痘がアメリカ大陸にもたらされ、逆にヨーロッパには梅毒がもたらされた。

1532年にスペインのピサロが南米ペルーで率いた軍隊は、200人足らずであったが、8万人のインカ帝国軍を打ち負かした。この南米侵略には感染症に免疫のない彼地に天然痘を持ち込んだことで少数の軍勢でも優位に進撃が進められたという背景がある。それまで家畜利用の習慣がなかったアメリカ大陸では、感染症の天然痘も麻疹も存在してなかったのである。

(スペイン風邪)

1918年から1920年に世界各国で極めて多くの死者を出した感染症がスペイン風邪である。現在ではH1N1亜型インフルエンザであったと解明されている。この感染症により、世界人口の4分の1程度に相当する約5億人の感染者が出たとされ、死者数は1,700万人から5,000万人と推計されている。現下のCOVID-19をはるかに超える被害を出した人類史上最悪のパンデミックであったといえる。

日本国内でも多くの患者が発生した。第1回の大流行が1918年10月から1919年3月、第2回が1919年12月から1920年3月、第3回が1920年12月から1921年3月にかけてであった。当時の日本人口5,500万人に対し2,380万人が感染し、39万人が死亡したとされる。

2009年に流行した新型インフルエンザは、このスペイン風邪と同種のものであったとされている。

3. わが国の感染症の歴史

(天然痘)

わが国で疱瘡と呼ばれた天然痘は、奈良時代735年に九州北部の大宰府管内で発生したものが最も古い記録であるが、遣唐使などの使節が大陸からこの病を持ち帰ったという説がある。当時京で政権を握っていた藤原家の四兄弟が九州で初の発症者が出てから2年後の737年に次々とこの病に倒れ、6月には朝廷の政務が停止してしまった。疱瘡が政治体制を揺るがした。疫病を引き起こす悪神は神格化されて疫病神となった。穢れを忌み嫌い、崇りを恐れ、怨霊を畏れる習慣が形成された。そしてそのことは平城京の都を放棄させ、恭仁京、難波京、紫香楽宮、平城京、長岡京へと短年の遷

都を繰り返し、やがて平安京を造営したという史実がある。宗教に庇護を求めて深く仏教に傾倒し、やがて大仏殿を建立、全国には国分寺を配した。これらの政治的行動の理由の一端には疫病流行の影響があったといえる。

しかし平安京に遷都したのちも穏やかではなかった。863年には再び感染症が流行したことから、疫病や死者の怨霊を鎮めるための御霊会を行った。疫病は怨霊の祟りと考えられたのである。864年に富士山が大噴火、869年には陸奥で津波を伴った地震がおこった。貞観地震・貞観津波と呼ばれる大災害である。この年に催された御霊会が今日も続く祇園祭の起源とされている。京では、天然痘以外にマラリア、インフルエンザ、赤痢、麻疹なども流行した。

天然痘については、繰り返しが国で発生したが、時が下り江戸時代にも大流行が記録されている。神道が忌み嫌う穢れとは疫病のことかもしれない。そしてその儀礼に含まれる手水や漱ぎの作法などは考えようによっては衛生慣行の様式化のように思える。神道が最高善と考える「清々しさ」とは災禍のない疫病対策の施された状態であったともとれる。やがて1796年にジェンナーによって種痘が発明されたが、わが国では1956年以降天然痘の感染者はいなくなった。1980年には、世界的に天然痘が根絶されたとWHOにより宣言された。天然痘は人類が撲滅した唯一の重篤な感染症だといえよう。

(狂犬病)

人と動物の接点という意味では犬は人間に最もなじみ深い動物だといえる。それゆえ狂犬病は4000年ほど前から恐れられてきた疾病であった。人類にとって致死率100%の感染症である。紀元前1885年の古代シュメール人の法律には、人を噛む犬の飼い主の責任が明記されていたという。紀元前500年にはギリシアの医師ヒポクラテスが人の狂犬病について語っている。

日本の養老律令(718年)にも「其(そ)れ狂犬(たぶれいぬ)有らば所在殺すことを聴(ゆる)せ」という狂犬病に関する記述があるが、これは制定時に狂犬病が流行していた唐の法令を模倣したために記されたもので、古代日本の国内で狂犬病があったか否かは定かではない。確かなのは、江戸時代末期の1700年代に狂犬病が流行したことである。当時の鎖国の例外になっていたオランダ、中国から入ってきて流行したという。この感染症は昭和の時代までみられたが、1957年以降では、わ

が国での狂犬病の感染は確認されていない。

(明治時代の防疫)

武士が治世した江戸の世が終わり明治時代を迎え、本格的な対外戦争であった日清戦争後の帰還兵については直ちに本土に上陸させずに検疫施設に一時収容し、伝染病発症の有無を確認する措置を講じた。当時内務省衛生局長を失職していた医師でもある後藤新平は臨時陸軍検疫部事務官長に採用され、検疫所の創設・運用に携わった。広島県の似島では7.5haの用地に、消毒、停留、避病院等の約140棟から成る検疫施設を僅か2か月で完成させた。ここで外地から帰国した687隻の船舶を検疫し、約23万人、93万点の物品を消毒・検査した結果、コレラ等の罹患者約1,500人を確認した。これにより内地でのコレラ流行を抑えたとして評価された。信頼を回復した後藤は、再度内務省衛生局長に返り咲くものとなり、その後台湾総督府民生長官に登用された。

当時台湾では、風土病と化したマラリア、ペスト、チフス、コレラなどの感染症への対処が課題であったが、とりわけ台北市の衛生状態向上のためには上下水道整備が有効と考えられた。しかし、その上下水道の敷設には、細く入り組んだ街路の改造なくしては進められなかったため、まずは台北市市区改正委員会で街並みを整序するべく調査し、市区計画を立案、そして実施したのである。このときに衛生管理の前提条件となる都市計画への造詣を深めたことが、後年後藤が関東大震災後の帝都復興に活躍した素地ともなった。都市計画・地域計画の端緒は感染症対策も含めた衛生状態の改善を含んだ空間政策であるといえる。

4. ウィルスの脅威

これまでみたように人類の歴史において、ウィルスなど病原菌との闘いがひとつの時代を画した面がある。原始的な細胞であり分裂することで増殖する細菌とは異なり、ウィルスは、それ自体に細胞を有せず、子孫を増やすための遺伝子のみを備える寄生生命体だともいえる。ウィルスは、DNA(デオキシリボ核酸)かRNA(リボ核酸)の核酸はもっているが、代謝機能もエネルギー機能もないため、他の生物に寄生して、その生物の細胞の代謝機能を占有して子孫を増やしていくのである。細胞に侵入したウィルスは、その細胞の中で多数の核酸のコピーをつくり、ウィルスたんぱく質をつくることで子ウィルス粒子が組み立てられ、その後細胞の外に放出される。そしてそ

れらが周りの細胞に再び侵入し、同様の手順で増殖する。1つのウイルスから生まれる子ウイルスは多いもので10万個にもなる。要する時間は早いものだと6時間くらいである。細胞をもつ生物ならばウイルスは何にでも寄生する。ウイルスは細菌にも寄生しているのである。

ウイルスで最も小さいものはポリオウイルス、最も大きいのは天然痘ウイルスである。遺伝子数でいえば、インフルエンザウイルスで8個、最も遺伝子数が多い天然痘ウイルスで約300個である。今回の SARS-CoV-2 の RNA 構造は極めて単純であり、二重らせんの DNA と異なり遺伝子の複製に失敗しがちである。つまり増殖の過程で変異し易いということである。

地球46億年の歴史の中で、人類(ホモサピエンス)の歴史はたかだか20万年であるが、ウイルスは30億年前から存在していたといわれる。ウイルスは人類誕生よりもはるか前から動植物に寄生・共存してきた。やがて人類に家畜化されたイヌ、ウシ、ブタ、トリといった動物だが、これら生物を自然宿主として多数のウイルスが寄生している。同様に生物である人間にも例外なく約300種の、さらにタイプ分けすれば数千種のウイルスが寄生しているという。人間は一生の間に200回くらいウイルスに感染するという。ウイルスは自然宿主である生物には支障を生じさせることなく共生しているが、そのウイルスが他の生物に感染するときには大きな障害を引き起こすことがある。それが場合によっては、天然痘、麻疹、狂犬病、ポリオなどの重篤な感染症として出現してきたのである。人間が動物を家畜化して、近接して暮らすようになったことが、他生物が有するウイルスに感染しやすくなった理由である。このことが、ウイルス起源の伝染病を人間集団に伝播させやすくするものとなった。しかも、原始共同体のような小規模の集団であれば、感染してもその集団内にとどまっていたウイルスであったが、より密度高く生活すること、また他の集団と交流する機会が増すことで空間的に感染拡大が起きるものとなった。いまや地球全体が一つの村のように小さくなる大交流時代では、感染拡大は容易に起きるのである。

自然宿主がチンパンジーと言われる1981年から流行の AIDS、1999年に米国で流行した西ナイル熱、2002年から流行が確認されたコウモリ由来の SARS、そして2012年にはラクダ由来の MERS などが出現して、次々とアウトブレイクした。2014年にはアフリカを中心に再度エボラ出血熱が流行することとなる。エマージング・ウイルスの自然宿

主は野生の動物である場合が増えている。人がジャングル奥地に踏み入り開発を進める機会が増えたことや珍しい野生動物をペットにしようとする嗜好がこれを助長している面もあろう。

一方でバイオ・テクノロジーの進化は遺伝子レベルでの科学的操作を可能としてきた。ウイルスなどの微小な対象物を実験室で扱うときには、外部に漏れ出ない物理的封じ込め度が最も高い P4(Physical Containment Level 4)、あるいは BSL4(Biosafety Level 4)と呼ぶ施設が必須となるが、奇しくも中国武漢市にこの類の研究所が立地していることから憶測を呼ぶものもなった。この研究所では、SARS ウイルスの遺伝子を用いて、その遺伝子の一部組み換えに成功している旨をすでに研究成果として発表していたということである。

感染症患者を治療する病室の完全密閉は不可能である。よって、当該病室は一般の病室とは隔離し、さらに厳重さを求めるには病室内部の気圧を外部よりも低く維持することで空気の流れが内向きの陰圧室を用いる。このような能力を備えた特殊な病室の数には限りがあることも、感染症に対峙するための制約になっている。

5. 衛生問題の解決を目指した空間政策

都市計画や地域計画など、いわば近代的な空間計画について、その成り立ちの起源は、究極的には住民福祉の向上であり、衛生環境の整備を包含している。その淵源を辿ると、18世紀後半から19世紀初頭に勃興した産業革命を機に劣化した居住環境の改善に行き着く。そして、その過程で解決すべき課題は、不衛生な生活環境の改善、貧困、社会階級・地域間の不均衡、劣悪な労働環境などの問題の解消に集約されよう。これらの悲劇を克服するために多くの思索がなされた。換言すれば、社会的な歪や軋轢を改善するために提起された社会改良運動の一環として考量された思想を原点としている。

たとえばビクトリア朝時代のロンドンでは、工場での劣悪な労働環境、スモッグに覆れた都市環境の悪化、児童労働の横行、そして貧富の差の拡大、不衛生による疫病の流行がみられ、街には貧民窟、ルーカリーが形成された。エンゲルスは『イギリスにおける労働者階級の状態』を著し、労働者の住宅・住環境に問題ありとした。このような状況の改善に向けては、空想的な共同体主義であるユートピア思想が生まれ、コミュニティ中心の無政府主義が生まれた背景がある。

片や工場を経営する資本家側では、ソルテア、

ボーンビルなどで、経営する工場とそこで働く労働者のための計画的工業村、カンパニータウンを建設して問題を解決しようとした。行政側は公衆衛生法による衛生環境の観点から建築規制を実施し、やがて住居法、都市計画法へと展開していったのである。

空間計画に関連した先駆的な著作の内容に概ね共通する事項は、急成長する都市における劣悪な生活環境を憂い、そうした状況を改善するための方策の提案だといえる。フリーエ、オーエンは、都市の非人間的な環境から逃れるために新しい工業コミュニティ、理想工業村の建設を提案した。一方ブルードン、ルクリュヤクロポトキンは、資本主義経済を解体、かつ国家を廃し、それに代わって自治に基づく相互扶助的経済を導入し、意思決定権を地域レベルに移すことを主唱した。これに対して、より緩やかな社会改革を志向するフェビアン協会がロンドンで設立された。のちに英国労働党の母体となる組織である。

そうした背景の19世紀最末期に登場したのがハワードの田園都市構想であった。マンフォードをして飛行機と並ぶ20世紀最大の発明と言わしめた田園都市構想は一世を風靡し、発祥のイギリスのみならず、広く世界に伝播していった。

太古の原始的な人間活動は、狩猟生活から始まった。定住性の低い、移動を常とする生活であった。この限りでは感染症の伝染拡大の確率はかなり低かったはずである。やがて農耕生活が定着するに従い、協同作業を要するため、ある程度の集団を形成して集住するようになった。このような居住形態では、感染者が発生しても小さな集落内に病因はとどめられ、また距離を保った他の集落に感染が広がる可能性は低かった。

しかし、都市という密集活動装置の出現は、感染症拡大を助長するものに他ならなかったのである。都市での不衛生を排除し、非都市の快適さを享受しようという「都市と農村の結婚」を表明したハワードの思想が咀嚼されて、都市郊外部のニュータウンを誕生させた。さらに衛星都市論への展開は、中心都市を越えて周辺地域と連担した広域圏での計画を発想する始まりでもある。

1924年にアムステルダムで開催された国際住宅・都市計画会議は、都市計画から地域計画、さらにはより広域の国土計画の必要性に言及した。

上述してきたような起源と経緯を経てきた空間計画については、おしなべて社会改良、社会救済の意図から発している。いずれもその精神は自然の成り行きに任せておくという自由放任(レッ

セフェール)ではなく、人間の叡智がより良い方向へ意図して導くべきだとするリベラルな設計主義の立場に基づいている。感染症対策の空間計画的解決には、自生的秩序論を超えた政策の復活が必要である。

如上見てきた細菌・ウィルス対人間という感染症対策を住まい方の観点から考察すると、生活における動物との接触濃度とそれらとの距離感に係るものであった。人間と動物との距離を考慮した一種の重力モデルを想起して相互の関係の制御が当該問題解決のためのヒントとなり得る。例えば日本脳炎は、ブタの持つウィルスと人間の間介在する蚊の存在が感染の流行を生んだ。過去、毎年1,000人程度の感染者の発生をみてきて、1966年には2,017人の発症者を数えピークであった。現在では一年あたりの日本脳炎感染者は、10人程度である。厚労省は毎年、ブタの日本脳炎ウィルス抗体獲得状況から日本脳炎ウィルスの蔓延状況を調査しているが、それによれば毎夏、日本脳炎ウィルスを有する蚊は確実に発生しているというのである。それでも発病者が減少し、感染が続発するような流行に至らないのは、ブタの畜産を行う所と蚊が発生しやすい場が、かつてよりも居住地の近傍では少なくなり、都市生活をおくる市民とは距離ができたからだと推理している。近年の住まい方の変化が日本脳炎発生の多寡に影響を与えている証左である。都市に密集・集中して労働・生活することを広域で分担して、しかも満員の通勤電車での移動を少なくし、さらに通勤時間を短くしていく広域分担施策は、結果として感染症対策に通じるものである。

もっとも近年では観光客の増加のように、日常の反復運動以外で、距離が遠くともその抵抗を容易に乗り越える不定期なモビリティの向上やトリップ量の増加があり、このモデルでは説明しきれない要素が付加されていることも事実である。

6. これからの社会について

世界的パンデミックをもたらせているCOVID-19は、現在なお進行中であるが、いずれ終息させなければならない。しかし、その暁のいわばコロナ禍後の社会は政府がいうような「新しい生活様式」にとどまらず、これまでとは大きく異なる社会となるのであろう。それは生活慣行にとどまらず、政治、経済、国際関係など、あらゆる領域で新しい局面が生まれるはずである。

翻って今後繰り返されるであろう新たなエマージング・ウィルス出現による災禍も考慮してお

かねばならない。感染症対策を戦争に擬える政治家がいるが、このことは国際化が進行するなかで国家単位の閉鎖主義、孤立化に通ずる思考を彷彿とさせる。新たな自国優先主義、アンチ・グローバルイゼーションが助長されるものと憶測されるのだ。国家を単位とする思考様式は、その拡張があってもブロック経済化などにとどまるものとなるだろう。その際に新興大国の中国はどのような振る舞いに転じるのだろうか。一帯一路政策がこれからも堅持されていくのかを注目したい。

コロナ禍の発生地が世界の工場と化している中国であったことから、マスク、防護服などの医療関係製品をはじめとする諸物資の供給が滞った。さらに中国はそれらを外交交渉の取引材料に使うとすらしている。コストにかかわらず戦略的物資の自国生産回帰を進めるか、あるいはリスク分散的な水平分業が求められる。

国内では、感染者数が多い東京への人口、諸機能の一極集中の不利益があらためて実感されたが、それらの地方分散の契機となり得る。そして、人と人との直接対面を忌避する傾向は、インターネットを活用したバーチャルな面会が推奨され、常態化するであろうが、このことも東京に集中する意味を減少させることとなる。事務所床、集客スペースの需要は減少する。東京一極集中という空間秩序がどう是正されるのか、その時の空間的誘導施策はいかにあるべきなのかは国土政策の課題である。各都市圏レベルでは広域展開した分散型の圏域構造を目指していくべきであると考えられる。

また感染集団の詳細をとらえるためには、包含される個人個人の属性、行動履歴等の情報把握が必然となる。場合によっては個人の血液型から始まって、各種の身体診断の数値、病歴、予防接種の履歴、抗体の保有状況、果ては遺伝子情報などの生体情報までもが政府に情報管理されることもあり得る。台湾では個人情報と紐付けしてマスクを一律に配給する施策が奏功した。今回の給付金の受け取りなどでマイナンバーカードが普及しそうであり、国による個人情報の管理は進むであろう。また他国訪問に際しては、パスポートとともに対象疾病の予防接種の接種記録証明書（イエローカード）を求められる状況も想定される。

そして現下の状況では多くの要望が中央政府に向けられ、地方分権に逆行するベクトルが認められる。1980年代後半からの小さな政府指向は、強い中央、大きな政府を求める傾向に変化していると筆者には映る。地方回帰とあいまって中央の再分配機能の強化による地域間格差の是正がより

期待されていくのではないかと。

この感染症対策は何よりも人との接触が避けられるべきものとなる。国土政策は交流、対流に代わる新しい価値と目標が求められるが、サイバー空間での交流は、リアルの人間を見えづらくし、個人の代理たるアバターが個性を表現する存在となる。

実社会では人の顔はマスクに覆われ、より匿名性が確保されていく。またマスク着用が衣服と同列の当然の装束となるなかで、マスクは各人各様の個性発揮の道具となる可能性が高い。バーチャルとリアルの世界の間で人間はアンビバレントな存在となるのではないだろうか。

人と人との直接対面を忌避する傾向は、インターネットを活用する機会を増加させる。かつて電話の普及がビジネスシーンや人間づきあいを変えたように、インターネットを用いた新しい様式がより深化することは当然であり、こうじてAIが人と人とのコミュニケーションから始まって、商談や裁判、果ては外交交渉までも人間に代行して処理するような可能性も否定し得ない。

7. おわりに

6月中旬現在でわが国の累計感染者は17,628人、死亡者数931人、世界合計では、感染者数は8,320,288人、死亡者数447,628人にのぼっている。

わが国で緊急事態宣言が発出された4月7日から解除された5月25日までの約7週間にわたる諸活動の停滞は、これまでにない非日常の自粛期間をつくった。アフリカ、南米での感染者の増勢は未だピークを迎えていないが、それ以外の地域での感染症流行には収束傾向が認められる。もっともこれからも第二波、第三波の不安は残しているが、ポストコロナ禍の再出発は始めなければならない。

これからの復興のための重要な行動に老齢国家となったわが国が、どこまでの復元力を持つのか不安もあるが、一方でこれを境とした新様式の時代への転換は進めなければならない。諸々の旧弊をただす絶好の機会でもある。

【参考文献】

- 山内一也 (2005) : 『ウィルス 究極の寄生命体』 日本放送出版協会
- ジャレド・ダイヤモンド (2012) : 『銃・病原菌・鉄 一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎』 草思社
- 池上彰・増田ユリヤ (2020) : 『感染症対人類の世界史』 ポプラ社